

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F
TEL/FAX: 092-260-3989
E-mail: jimu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク (CMN) は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

126

特集 チェルノブイリ被災地を想う

CONTENTS

チェルノブイリ被災地を想う / 野良に子どもたちの歓声が響く里山の再生のためにー3・11からの教訓を考えるー / コラム ミンスクの日 / 古本募金しゃぼんのご紹介とお礼 / シンカブルのご紹介 / FUKU-NETパネル展出展のご報告 / 2021年度事業・決算報告 / 福島訪問報告会のご報告 / インターン生の紹介 / 支援者のお名前とメッセージ



ゴメリ市のПарк Гомель (公園) で散策中に会った男の子。
(2012年9月、ベラルーシ)

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を
支援して下さっている皆さまへお届けしています。
送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

また団体ウェブサイトでもPDFファイルにてご覧いただけます。
<https://cher9.org/information/news/>

郵便振替口座

01770-1-65328

楽天銀行

他の金融機関からは 一七九支店 (当) 65328

ジャズ支店 (支店番号201) (普) 7017104

住信SBIネット銀行

法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416

※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

チェルノブイリ被災地を想う

寄稿／木村 真三（放射線衛生学者、獨協医科大学国際疫学研究室福島分室長）



世の中がコロナ禍に入り、最後にウクライナ、ベラルーシを訪れたのは？とパスポートを見てみると2020年1月1日にウクライナに入国しておりました。

現在、ウクライナが北大西洋条約機構（NATO）加盟の意思表明をしたことからロシアは

10万人とも言われる軍隊を国境線に配備し、緊張状態が続いています。2022年1月14日、

アメリカ国防総省は「ロシアがすでに工作員たちを潜入させて、ウクライナがロシアの権益に

攻撃を仕掛けたことを偽装させようとしている」と発表。翌15日、マイクロソフト社はウ

クライナ政府機関と関連組織のシステムにコンピュータ・ウイルスが埋め込まれていると発表

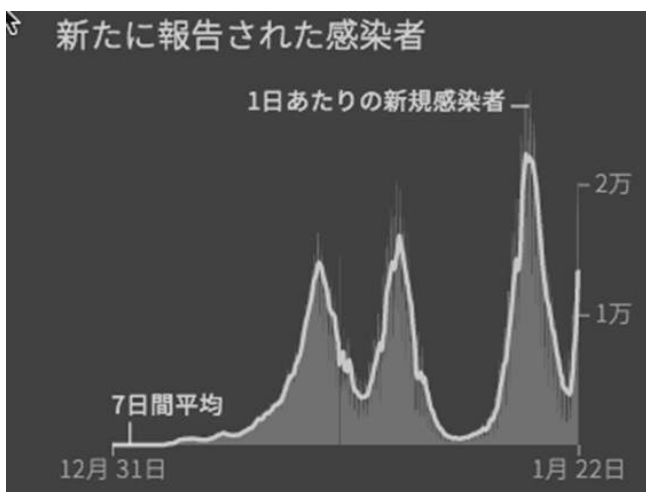
しました。ウィルスは既に除去されたそうですが、ロシアは虎視眈々とウクライナに狙いを

つけ軍隊を侵攻させようとしているのです。ロシアはこれまで、2014年のクリミア半島併合

（クリミア危機）、ウクライナ東部紛争でも同

じことを繰り返しています。

こうした状況の中で、ウクライナは新型コロナウイルス・オミクロン株がまん延し、第4波の大流行になっています。日本同様、現在の感染率は上昇の一途をたどり、先の見えない不安が募っています。



ウクライナの新型コロナウイルス感染者数の推移



強制避難地区となった村の入り口
(2006年撮影)

私が気になっているのは、チェルノブイリ30キロ圏内（ゾーン）に違法と知りながら暮らす老人たちのことです。ゾーン内で暮らす人々を指す言葉にサマシオールという言葉があります。この言葉は、ウクライナやベラルーシ国内ではほとんど耳にすることはありません。あまり良い言葉ではない気がします。ここでは、単に「婆さんたち」と親しみを込めて表現させていただきます。ウクライナ語でも、ロシア語でも「婆さん」のことを「баба（ババ）」と言います。新型コロナウイルスがまん延する前まで、私はふた月に一度のペースでウクライナを訪れ、婆さんたちに体の具合を尋ね、食料や医薬品を持って家々を回っていました。婆さんたちの安否



ゾーン内へ移住してきた家族
(2006年撮影)

カザフスタンでの生活が苦しくなり、親類を頼ってゾーン内の村へ移住した

が気になります。そのきっかけとなったのが、チェルノブイリ原発事故から30年を迎えようとしていた2015年11月、東京新聞の取材ガイドのため記者の方々を連れて、ゾーンに入った時のことです。朽ち果てたカルテが散乱した病院や子ども達が核戦争時に使う目的で配備されていたガスマスクが大量に散乱している学校の教室。一人当たり手持ちトランクケース1個に3日分の衣類と貴重品を持って避難指示が出たプリピャチ市民が居住していたアパート群内には、あらゆるものが盗難に遭い、持ち出され、当時の面影は僅かに残る程度。事故から29年間経過した廃墟の数々は、見るも無惨なものばかりでした。

翌日はサマシオールの婆さんたちの暮らす村を訪ねたのですが、国営企業チェルノブイリゾーン技術情報サポートセンターのガイド役セルゲイさんが気になることを言いました。「俺はあんな人気（ひとけ）のない廃墟を喜んで見るよりも、ここに来て年寄り達の振る舞う手料理や自家製ウオッカを飲みながら、語り合う方が何倍も意味があると思うのだが」

そこで、2016年1月、改めて婆さんたちの村を訪ねることにしました。ゾーン内の村々は、事故後、ソ連政府により汚染の少ない地域に隣接するような形で住宅が建設され、移住を余儀なくさせられました。村ごと一カ所にまとめて移住することは少なく、今までの暮らしとは全く異なる生活を強いることもありました。そのような生活になじまず、国の賠償を捨て、もとの村に帰ってくる人びとがいました。当初は戻って来た住民たちを排除するため軍が投入されましたが、排除されてもほとんどの人は戻ってくるので仕方なく事故当時、既に成人（ソ連では18歳から成人）に達していた人びとに対しては、自己責任で生活することを許されました。ウクライナ憲法では、居住する権利を保障しています。

手料理を振舞うマリア婆さん

(2016年1月7日筆者撮影)



その生活はほとんど自給自足の生活ですが、主食であるパン、サラダ油、調味料などは2週間に一度、ゾーンの外にあるお店の人が移動販売車で売りに来ています。もちろん、近くに病院などがある訳ではありません。僅かに電気が通じているくらいです。緊急時のため、携帯電話をあてがわれているのみです。国からは賠償として衣食住をあてがわれましたが、それを放棄して帰還してきたため彼らは普通の年金受給者として生活しています。現金が必要な場合には、郵便配達人に携帯電話でお願いして運んでもらっていたそうです。

ウクライナでは、東方正教会に由来するユ

リウス暦を用いるため1月7日が聖誕祭（クリスマス）となります。今年は、聖誕祭を婆さんたちと一緒に祝いました。オパチチ村は原発から10〜27キロに位置し、事故前には681人が暮らしていました。事故後帰還してきた人びとは120人ですが、多くは老衰などでこの世を去り、私が初めて訪れた時は9人が住んでいました。

マリア・ペトロブナさん（当時88歳）に話を伺いました。事故から8日経過した5月4日に連れ出され、ザクチュジャンカという村に一時的に住まわされました。しかし自分の土地もなく、知り合いもいない中、何もすることがないため散歩をしていた時のこと、村人から「怠け者が来た」と言われ、帰村を決意。1年後に一人で村に帰ってきました。その春、ジャガイモを植えているとヘリコプターが上空に停まり、その窓から誰かが拳を振りだしたので、斧を振り上げて抵抗したそうです。

息子を早くに亡くし、一人暮らしをしているマリア婆さんのことをキエフに住んでいる娘夫婦はとても心配しています。しかし、村を離れることはないと言います。

気丈に振る舞うマリア婆さんですが、外は雪で閉ざされマイナス10度を下回る中、誰も訪ね

てくる予定のなかった聖誕祭。突然訪れた私たちに、「嬉しい」と涙を流し手料理を振る舞ってくれました。

帰りの車の中、ガイドのセルゲイさんが言います。「先ほど出された料理は腐りかけた鶏肉をごまかすためのもの。これがサマシヨールの生活だ。」ほとんどが自給自足の生活。以前は週に一度、近隣の町からパンなど必需品を売りに来ていた移動販売車も、人口減少に伴い月に1回になりました。

福島県では帰還を進める避難解除地域の多くは過疎地です。後継者のいなくなった故郷は買ひ物、医療、交通などのインフラが事故前に比べ大きく減少しています。今年は例年になく冷え込む日が続く福島県では、積雪も気になります。誰が除雪をしてくれるのか。国道、県、市町村の自治体が管理する道は時間がかかっても除雪をしてくれます。しかし、戦前、戦後に開拓者として入植してきた人々の住まいは自治体が運営する道からずっと奥にあることも珍しくありません。こうした地域に暮らす人々は、私道の部分の除雪は個人で行わなくてはなりません。北国に暮らす人々の苦労は雪の少ない地域の方々の想像をはるかに超えています。

こうした生活ぶりをスタディーツアーや勉強



避難指示解除地域
(南相馬市小高区、2021年撮影)

会で知ることとは、チェルノブイリから学んできたことが活かされます。逆も真なりです。本誌でも寄稿してくださったことのある飯館村の伊藤延由（のぶよし）さんは、山菜やキノコ、またジビエと呼ばれる野生生物の肉などをアク抜きと称して、脱放射性セシウムができないか7年ほど前から試みています。私もそのお手伝いをしているのですが、灰や重曹でアク抜きをするより、塩漬けて、水にさらすことで放射能のほとんどを除去できることを見つけました。こうした技術をウクライナやベラルーシの放射能汚染地域で講習会を行うことで、放射能の被害を低減させることができます。

著者プロフィール

木村 真三 （きむら しんぞう）

獨協医科大学国際疫学研究室福島分室

1967年愛媛県生まれ。放射線衛生学者。

2000年北海道大学より博士号（地球環境科学）取得。

放射線医学総合研究所、労働安全衛生総合研究所を経て、

2011年8月より獨協医科大学准教授、

獨協医科大学国際疫学研究室福島分室長

2013年より福島県在住。

決して原発事故を矮小化させるものではありません。ある日突然、住処を奪われた方が何とか暮らしていきたいと望まれた時の苦肉の策です。それでも、田舎の人々にとって住み慣れた場所は大切なのです。これは洋の東西を超えて同じことなのです。そのことを支える立場の方々も理解して欲しいのです。

ベラルーシ訪問について

新型コロナウイルス感染症拡大および、ベラルーシとロシアの政情不安のため2020年度よりベラルーシ訪問は見合わせております。

安全に渡航できる環境が整いしだい訪問を再開する予定です。

（再開時期は現在未定）

ベラルーシの様子を長期にわたって皆様にお届けすることができず大変申し訳ありませんが、ご理解いただければと思います。

今回の訪問予定が決まりしだい通信・ホームページ等でお知らせいたします。



野良に子どもたちの歓声が響く里山の再生のために

＝ 3・11からの教訓を考える ＝



菅野 正寿

NPO法人ゆうきの里東和
ふるさとづくり協議会
遊雲の里ファーム主宰

■「主体はあくまでも農家」大学研究者との 実態調査

2011年3月11日の東日本大震災と原発事故から2か月後にいち早く日本有機農業学会（新潟大、茨城大、東京農工大、横浜国立大、福島大など）の土壌学、森林学、農村社会学、作物の専門家が、福島県二本松市東和地区の農家住民と共に放射能汚染による里山の実態調査に入った。東和地区では住民主体のNPO法人が組織されていて、自ら測定して放射線マップづくりに取り組んでいたからである。

NPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会は2005年の平成の大合併を前に、旧東和町（人口約6,000人）の農家と商店を中心に設立した（会員250名）。

有機農業の産直に取り組んできた農家、荒廃した桑畑を再生し、健康食品の桑茶、桑パウダー、桑の実などの生産者、特産品づくりの商店、都市との交流活動、健康づくりのグループなどが1年かけて議論し、地域資源循環のふるさとづくりを目的として、道の駅ふくしま東和の指定管理も受けて事業を展開してきた。

過疎、中山間地域が合併によって過疎に拍車がかかるのではないか、これまでの有機農業の

産直を通じた都市との顔の見える関係を継続していききたいとの強い思いがあった。

行政頼みの地域づくりから住民主体の地域づくりをめざした。道の駅ふくしま東和を地域づくりの拠点として、「田畑が荒れれば心も荒れる」との危機感から、「農地の再生」「山林の再生」「地域コミュニティの再生」をかけ、「里山再生プロジェクト」に取り組んでいた。

新規就農者の受け入れも30名を超え、道の駅の販売事業、産直事業、特産品の販売で事業売上高が2億円に達したときに原発事故は起きた。

この里山再生プロジェクトがあったからこそ、有機農業学会の研究者と共に「里山再生・災害復興プロジェクト」として、土壌、農産物、山林、水の放射能汚染の実態調査、さらに婦人の方を中心に健康、地域コミュニティの総合的な里山の再生の取り組みをすすめることができたといえる。

2011年の夏には支援をいただいた農産物



桑茶・桑パウダー



遊雲の里での農業体験

の測定器が道の駅に設置され、野菜、果物、山菜、米の放射能測定が始まっている。汚染された土でとれたものに不安が広がるなか、収穫したジャガイモを持ってきた生産者のばあちゃんが、「これなら孫に食べさせられる。」と測定した結果に安堵した顔は今でも忘れられない。じいちゃん、ばあちゃんにとって野菜づくりは家族のためであり、生きがいなのだ。

新潟大学・土壌学の野中昌法先生が「里山再生・災害復興プロジェクト」のリーダーとして、農家と一緒に田んぼや桑畑に何度も足を運んだ。「現場にこそ真実がある」との強い思いが先生にはあった。

「真の文明は、山を荒らさず、川を荒ら



菅野さん所有の田んぼ
セシウムの影響の調査にも
使用されました。

さず、村を破らず、人を殺さざるべし」として足尾鉍毒事件の真実を訴えた田中正造と野中先生は同郷の佐野市である。野中先生は新潟水俣病事件にも研究者としても社会活動にかかわっていた。「足尾鉍毒事件、水俣病事件の教訓、さらにチェリノブイリ原発事故の教訓を活かさなければならぬ」との強い意志が先生には流れていた。「農業を続けることによって必ず土も再生できる」との先生の言葉どおりに、20

12年には耕してつくった米、野菜はほとんど不検出となっていた。しかも有機的な土壌ほど放射性セシウムが吸着、固定化されることが証明された。私の水田土壌も3,000 Bq/kgであったが玄米は不検出であり、棚田の用水も放射性セシウムが山林に固定化されて水田への流入も激減していった。わらともみ殻には50〜100 Bq/kgが検出されたが、2015年からはこれも不検出となっていく。この土の力とイネの力をあらためて感じている。

どんな冷害や早魃があっても温帯モンスーンの気候の日本の稲作が約3,500年も続いてきたのは、この土の力と稲の力があつたからではないかと思うのだ。

■生産とくらしが一体としての里山の再生のために

「山の落ち葉は使えるのか」という不安が農家にはいまだにある。腐葉土をつくってきた農家は一時購入せざるをえなかったが新しい落ち葉は使えることが証明されてきた。二本松市はタケノコや山菜はいまだに出荷停止が続いている。炭焼きは大丈夫なのか、薪ストーブはどうなのか。福島県の70%を占める山林の除染は手付かずのままである。くらしと一体としてあつた里山・山林の再生が次の課題である。大学研究者と共に落ち葉も山菜も樹木も測定を継続しながら活用を図る方策をすすめるなければならない。



薪ストーブ

暖房だけでなく餅やキノコを焼いたり料理にも使用しています。



稲刈りの様子

山菜だけでなく、梅干しやたくあんなどの漬物が道の駅から激減している。竹細工、わら細工など里山と共にあったくらしの技が失われてはならない。農業の6次化というのであれば、このお年寄りの技と食文化にこそ支援の手をさしのべるべきである。

私の住む二本松市太田地区の商店街には、廃業してしまっているが、下駄屋、たまり屋、豆腐屋、麴屋、鍛冶屋などの屋号でよばれている。かつて農家が大豆を持っていき豆腐に、米を持って麴にしていた。農家と商店が連携して地域循環のしくみが



羽化したトンボのヤゴ



障がい者の皆さんの
はせがけ

あった。地域に豆腐屋、麴屋、たまり屋を復権させて経済循環の農商工連携にこそ支援の手を向けるべきではないかと考える。

今、福島県ではイノベーション・コースト構想という名で避難解除された浜通りを中心に植物工場、水素工場、ロボットフィールド産業都市が建設されている。

農薬散布や肥料散布のためのドローン基地も整備されている。企業、大学をも巻き込んでこの3年間で3,000億円もの復興予算が使われている。大手資本を誘致する構造は原子力ムラの構造と変わりはない。浪江町の商工会の方が、「地元の意見も聞かず、雇用も生み出さない。」と話す。

大規模農地整備をし、空から農薬を散布し、無人の大型トラクターを駆使する農業は持続可能な農業といえるのだろうか。地域コミュニティが戻るのだろうか。

子どもたちやお年寄りが追い出される、地域コミュニティや生活文化が失われ、多様な人とかかわりや多様な生き物の世界が失われていくとは思えてならない。



安達太良山

このイノベーション・コースト構想と対峙した、多様な農業による生態系の環境を守り、家族農業と集落営農を組み合わせた地域経済循環の持続可能な共生のありかたを提案していくことが大切ではないかと思う。子どもたちの豊かな教育力を育む、お年寄りの自給と生きがいをつくる地域づくりが求められると思うのだ。

■都市と農村の顔の見える関係づくりの大切さ

東和地区では30年以上にわたり、生協や消費者グループとの産直活動に取り組んできた。棚田米、完熟トマトをはじめ旬の野菜を届け、生協の組合員さん、消費者のお母さんが畑にやってきてトマトを丸かじりしたり、大根を引き抜いたり楽しく交流をすすめてきた。残念ながら

原発事故によって3割以上の産直が分断された。私が5年前に農家民宿「遊雲の里」を開業したのは、この分断された関係を新しく取り戻したい、いまだに避難されている福島現状を知ってほしい、多様な役割の農業の価値を知ってほしいと思ったからである。

2011年11月に京都市でのシンポジウムで福島から避難し、京都でカフェを開いている一般社団法人みんなの手の代表の西山祐子さんと知り合い、交流が続いている。

3年前からは京都、関西から、毎年の正月に「ふるさとつながるツアー」の皆さんが私の民宿で餅つき交流にきていただい



京都から農家民宿での交流

ている。

最初の年は、「福島から関西まで避難している皆さんが、福島のお餅や正月料理を食べてくれるだろうか。」と心配しての受け入れだった。けれど、これまでの放射能への対策や測つてはつくり、つくつては測る農家の取り組みのお話しをしっかりと伝えることで、皆さんが楽しく餅つきをして、おいしく食べる顔を見て、ほんとにうれしかった。食卓を囲みながら顔の見える交流の大切さをあらためて思い、「顔の見える関係に風評はない」と実感することができた。

■例外の教訓に学ぶ、農村の復興

二本松市東和地区の木幡山には238年前の天明大飢饉の惨状を石碑に記した「天明為民の碑」がある。

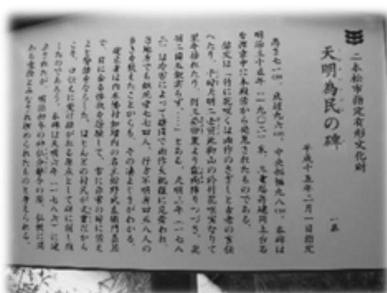
「同三（天明）夏より霖雨降続き 奥羽二国五穀実らず山里は種をも失ふ故に わらの粉のもち又草木の根葉まで食すれども 飢て死る人数を知らず この事を云へて 末の世まで暑に寒を忘れず 凶作のたくわえを心に懸む便りもと 物のあたいの高き事を書に残すのみ」（東和町史Ⅱ）

旧東和町、旧岩代町を中心に約1,000人もの餓死者、行方不明者があったと云われる。その後、天保の大飢饉など冷害が続く、二本松藩にその窮状と年貢の減免を訴え、15,000人余りの農民一揆を何度も起こしていく。

この冷害の教訓から官民挙げて農村復興策として、大豆、小麦、馬鈴薯、雑穀をはじめ、特産物（養蚕、葉タバコ）の振興を奨励して開墾と食料増産を推進していった。昭和の時代に入っても冷害は続き、酪農や綿羊、果樹も振興されていく。平らな土地は一坪でも耕し、山を墾き、血のにじむような先人の労苦があつて、災害を乗り越えて多様な作物の多様な食文化が育まれてきたのだと思う。



天明為民の碑



木幡山
隠岐津島神社境内

東北の農民は戦前、農民兵士として戦地に駆り出され、戦後は高度経済成長の下、ビルの建設現場や高速道路、新幹線建設の現場に出稼ぎ者として労働力を奪われてきた。首都圏の食料も東北からである。そして電気も福島からだった。そしていま、原発のゴミまで過疎の村や町に押し付けようとしている。

大量生産大量消費の都市の暮らしは東北を踏み台にして成り立ってきたとは思えてならない。食料自給率1%の東京に持続可能な暮らしはあるのだろうか。

東京一極集中に歯止めがかからず、地域が壊され、基地や原発やゴミを地方に押し付けてきた構造こそが3・11の教訓ではなかったのかと思えてならない。



菅野さんが運営する
農家民宿 遊雲の里
宿泊だけでなく
農業体験も可能です

■子どもたちの歓声が響く里山の再生

「うわー、ドジョウがいた！」
「タニシもいる！」

里山の棚田に子どもたちの元気な声が響きわたった。二本松市立東和小学校4年生40人が地元集落（布沢の環境を守る会）で整備した田んぼビオトープの生き物観察会にやってきたのだ。素足になって田んぼに入り、「気持ちいい！」と大喜びだ。

3年前に集落の棚田の真ん中に200坪の田んぼビオトープを整備した。タニシ、オケラ、ゲンゴロウ、ドジョウ、ギンヤンマのヤゴもいる。アキアカネや糸トンボなど10種類以上のトンボも観察できる。



「ギンヤンマのヤゴだよ！」

10年前、この子どもたちは3歳だった。原発事故と放射能によって、「外では遊ぶな」「マスクをしろ」「土に触るな」という環境のなかで幼少期を過ごしてきた。水遊び、どろ遊び、山歩きなど豊かな成長期の友達との大切な体験を奪ってしまった原発の罪は重い。だからこそ、子どもたちのカエルやトンボをつかまえながら泥んこになって生き物探しに夢中になる光景はこのほかうれしかった。

私たち農家は米や野菜だけをつくっているのではないということにも気づかされた。棚田の風景やたくさんの生き物、そして子どもたちの豊かな体験、そういった里山の価値を丸ごと消費者や都市の住民につたえなければならぬと思うのだ。

美しい里山も美しい棚田も先人の気の遠くなるような長い年月の汗と労苦の結晶と思うのだ。それをただか原発の時代の50年で汚してしまった罪は重い。

だからこそ私たち大人は次代の子どものために土とふるさとを再生しなければならない。

冬だより

コロナ禍のベラルーシ で迎える新年



フィルモノヴァさん一家

左からバーヴェル君、フョードルさん、バレンチーナさん、アンナさん

こんにちは、2022年のお正月を迎えたベラルーシからのレポートです。この冬は、気温がマイナス10度に達する日があるかと思えば、翌日はプラスの温度になり回り一面に積もった雪がいつきにとけていくこともあります。コロナ禍で新年を祝う様子を、バレンチーナさん、アンナさん母娘のフィルモノヴァ家の取材協力とともにお伝えします。以前インタビューに応じてくれたお二人ですが（チェルノブイリ通信No. 120掲載）、今回はお住まいのチェルヴェニ市からオンラインで出演してくれました。

現在4人暮らしのフィルモノヴァ家のメンバーは次の通りです。車のエンジニアとして働く父フョードルさん（55）とスクールカウンセラーの母バレンチーナさん（47）はともにモギリョフ州クリマヴィチ市の出身です。兄バーヴェル君（21）と妹アンナさん（19）は自宅から約65km離れたミンスクの大学に通っています。パーヴェル君は情報系の大学4年生（最終学年）。アンナさんは教育大学の3年生で、家族の中で彼女だけが放射能による健康被害を受けています（チェルノブイリ原発事故身体障害



冬のベラルーシの様子

者手帳の所有者でもあります）。一家は2007年にモギリョフ州のチェリコフスキー地区からミンスク州のチェルヴェニ市に引っ越してきて、現在に至っています。

2021年12月18日（土）、福岡での勉強会に出席した獨協医科大学准教授・木村真三先生とCMNメンバーの皆さんがズームでバレンチーナさん、アンナさんと会談しました。

最初に、バレンチーナさんは自分の娘アンナさんがコロナ禍で大変な思いをした体験を語りました。「私たち親子もチェルノブイリ原発事故の被害者で、放射能汚染により生まれつき免

疫の弱いアンナはコロナの影響でこの秋に重病にかかりました。家族全員が最初に感染した昨年は（2020年9月末）、21日間の自宅隔離を経てすぐに回復しましたが、今回は急激に食欲が落ちて痩せ細っていく危険な状況が3ヶ月もの間続きました。最近ようやく食べられるようになり、大学に通えるようになったところです。このウイルスの恐ろしさと、徹底した感染予防対策の大切さをあらためて感じさせられました」。

現在ベラルーシにおける1日の新規感染者は約1500人です（12月末、保健省発表）。

表）。2ヶ月ほど前から公共交通機関、食料品店、デパート等でのマスク着用義務が解除されていますが、車内や建物の中では半分近くの人々がマスク姿です。飲食店の営業時間、多数の人が集まるイベント開催はほぼ通常どおりですが、各箇所に消毒液が設置され、マスク装着を推奨する提示が見られます。従来の生活を楽しみながらのリスク管理は、個々人がしなければいけません。

カウンセラーとしてチェルヴェニ市の学校で働くバレンチーナさんは、福島原発の事故直後

から現場で放射能汚染の研究報告を行いながら被害者の心のケアもする木村先生の話を真剣に聞き入り、自身が知るチェルノブイリの経験と重ね合わせていました。



アンナさん
自身が通う教育大学前にて



町のショッピングモール

続いて、インターンとしてCMNをサポートしている荒木さん、内田さん、田中さんとアンナさんによる大学生同士の会談が行われました。大学ではベラルーシ語・中国語を専攻するアンナさんですが、もともとは日本のことが大好きで一番行ってみたい国だと言います。「日本の色鮮やかなファッション・コスメティックや美味しい料理・豊富な種類のお菓子など、気分が明るくなる華やかな文化にずっと憧れてきました」。日本の学生生活にも興味津々で、「私の所属する専攻科グループでは毎日たくさん課題を出されます。私は自宅のあるチェルヴェニから片道1時間（マイクロボスと地下鉄）かけて大学まで通っているの、夕方に家へ帰ってレポートを作成していると1日があっという間に終わってしまいます。皆さんが通う日本の大学でも同じように多くの課題が出ますか？講義の後、遊ぶ時間はありますか？友達同士でどんな所へ行きますか？日本に来た時はデイズニーランドを訪れてみたいと思っています

◀ 寿司を作るのが好きなアンナさん（当時12歳）



▶ （上）アンナさんとバレンチーナさん、
通信120号を手に

（下）アンナさんの得意料理、オートミール

が、他にお勧めの名所はありますか？どんな音楽グループが人気ですか？・・・」と人懐っこい笑顔で次々と質問をします。木村先生にも「私は海外でロシア語や英語を教える先生になりたいと思っています。メイクアップやスタイリストにも興味があります。外国人が日本で仕事を見つけるのは難しいですか？」と積極的にきいていきます。「どの分野で働くにしても、まずは日本語を身につけることが大事です。会話ができて、ある程度漢字を含めて読む力があると有利になります。」とアドバイスをもらうと、嬉しそうにうなずきながら感謝していました。

バレンチーナさん、アンナさんと木村先生、CMメンバーの皆さんとのオンライン交流は話はずみ、休憩を挟んで2時間近くに及びました。お別れの挨拶を覚えたばかりのロシア語と日本語で言い合うなど、すっかり仲良くなった。同世代のアンナさんと荒木さん、内田さん、田中さんにとっては、お互いの文化を知る上で有意義な時間となりました。

アンナさんは今も毎晩就寝前にホルモン剤を飲んでいて、年に一回は大きな病院での検査も

必要となります。免疫が弱いためインフルエンザなどの感染症にもかかりやすい体質ですが、本人はいたって前向きな性格の持ち主で、常に明るい色の服を着こなし、綺麗な花を育てるのが好きで、オートミールやパンケーキ、そして寿司など様々な料理にも挑戦します。どんな時もポジティブさを忘れないアンナさんはとても健康的に見えます。

オンライン会談の感想を楽しそうに話し合うバレンチーナさんとアンナさん。今回知り合った日本の方々をぜひ家に招待して家庭料理をふるまい、交流を続けたいということです。彼女達は新年を迎える準備中で、ズーム出演で使った広間にはクリスマスツリーが飾られ、部屋の窓枠にはイルミネーションが取り付けられてありました。

ベラルーシでは1月1日の正月を挟んでカトリック（12月25日）とロシア正教（1月7日）のふたつのクリスマスを祝います。国民の多くが正教徒なので、1月7日は家族連れで教会に出かける習慣があります。12月25日はカップルや友人同士で大型ショッピングモールやカフェ・レストランに出かけ、買い物や食事を楽しみます。伝統的な新年の行事（正月と正

教クリスマス）の前に、わりと自由なかたちで過ごせる祝日で、若者の間で人気です。

2022年、新しい年を迎えるにあたって、バレンチーナさん達フィルモノヴァ家の招待を受けました。「正月の迎え方は、そ



お正月用の料理

(上) 左からカニカマサラダ、
シューバサラダ、鶏肉料理など
(左) 手前がカナッペ



の一年の過ごし方を示します。新年を一人で迎えると、その年が孤独になってしまう……。私達の家で一緒に祝いましょう！」と、家族の大切な行事にもかかわらず、温かいおもてなしをしてくれました。

大晦日の12月31日、バレンチーナさんとア
ンナさんは朝早くから食料を買い込み、正月用
の料理を作り始めます。二種類のサラダ①
《シューバ》（ニンジン、ニンジン、ビーツ、
ジャガイモ、ゆで玉子を細かく切ってマヨネー
ズで合わせたもの）②《カニカマサラダ》（カ
ニカマ、炊いたライス、ゆでたエッグ、コーン
をマヨネーズで混ぜたもの）、ブドウ、リン
ゴ、バナナの果物とチーズのかけらを串にさし
た《カナッペ》などバリエティ豊かなものが出
来上がっていきます。

昼過ぎにご主人のフョードルさんが仕事か
ら、長男のパーヴェル君が大学の試験から帰宅
しました。その後、皆それぞれの部屋で一眠り
します。夜中に新年を迎えるためでしょうか。
夕方になると映画《運命の皮肉》（1975）
をテレビの大画面で見ます。大晦日にこの映画
を見るのが、ロシア語圏の人々の伝統だと言

ます。その間、アンナさんやパーヴェル君は自
分の部屋のものを整理整頓したり、お世話に
なっている先生や友達にお祝いのメッセージを
送ります。

午後10時過ぎ、作っていた料理をテーブルの
上に並べていきます。大きな鶏肉を焼き上げ、
デザートにケーキを用意し、グラスに赤ワイ
ン、シャンパン、ジュースを注いで準備完了で
す。カラフルな料理で綺麗に彩られた食卓につ
くと、両親がお祝いの言葉とともに乾杯の音頭
をとります。食事を楽しみながら一年の思い出
を振り返ったり、来年の抱負を語ったり、話に
花が咲きます。

夜中の0時が迫ると、皆グラスを持ち、カウ
ントダウンが始まります。新しい一年への願い
を心に描き、「明けましておめでとう！」とお
互いを祝います。その願いは口に出すと叶わな
いので、それぞれ心の中に秘めます。その後も
眠たくなるまで賑やかな食卓を囲み続けます。
外では火花が打ち上げられていて、冬の夜空に
咲く大輪の華を窓越しに見ることができます。
夜中の3時過ぎに就寝すると、お昼までぐっす
りと眠ります。

今年は1月2日が日曜日で休日でしたが、ベラルーシ人の正月休みは基本的に元日の1日のみとなります。12月25日カトリック、1月7日正教会のクリスマスもそれぞれ休日となります。また、この3つの大きな新年イベントが続く期間は、学生の試験時期とも重なります。勤勉に働き学びながらも、祝日を一杯楽しく過ごすベラルーシの人々からは幸せなエネルギーが満ちあふれています。

お正月明けには、ベラルーシ国民にとって大事な正教のクリスマスがあります。1月6日の夜中から翌7日にかけて各正教会で大々的に祝われる祭日で、今年はミンスクにある日本ニコライ堂で行われたクリスマス行事に参加させていただきました。

6日の夜10時、メインのミサが始まります。すでに多くの信者さんが木造建ての教会内にいて、私は中列から後列の間ぐらいの立ち位置になりました。その後も地域住民が次々と訪れ、深夜になるとその数は教会内に収まりきらないほどに膨れ上がりました。美



在ミンスク日本ニコライ堂



正教の本・イコン画・ロウソク等がある教会隣接店、奥の建物では日曜学校の授業と日本クラブの文化活動が行われる

しいイコン画が飾られた室内で神父さんの言葉と合唱団の歌声が響くなか、訪れた人は一緒に声を出して祈り、十字をきったりロウソクに灯をともしたりします。夜中の1時過ぎになると、マスクをしていたせいか息苦しく感じると、出口が見えないほどの人で埋め尽くされていました。何とか抜け出ることができましたが、深夜3時近くまで続いたミサの終了間際まで満員の教会の中には入れませんでした。隣接するカフェの中にも祈りを捧げる人達でいっぱいだったので、教会の外を囲んでいた信者さん達

と一緒に氷点下のなかを過ごしました。積雪と強風でかなり凍えましたが、周りの方々は祈禱に集中していて寒さを感じていないようでした。

7日の朝にもミサが行われますが(午前10時から二時間ほど)、訪れる人の数は真夜中の時よりも少なめです。各家庭では華やかな料理で食卓を囲み、お正月や誕生日のように家族皆で祝います。

2022年2月16日に創立10周年を迎える在ミンスク日本ニコライ堂ですが、国内でも幼



教会（右）とカフェ（左）

その先にエコロジー探検コースが広がる



カフェ《テントウムシ》

（上）外観

（右）店内のカウンター

店内には手作りケーキが並ぶ



カフェ《テントウムシ》店内

い子供達・若者が多く通う教会として有名です。敷地内にはバードウォッチングができるエコロジー探検コース、手作りケーキが並ぶおしゃれなカフェ《テントウムシ》がオープンするなどして発展中です。また日本にゆかりがある教会ということで近々、隣接する日曜学校の建物内に日本文化クラブも設立する予定です。

今冬のベラルーシでは、温かい家庭のおもてなしを受け、伝統や文化を知る貴重な体験ができました。その過程でお世話になったチェルヴェニ市のフィルモノヴァ家、ミンスクの日本ニコライ堂の皆さんには感謝の気持ちで一杯

です。寒く長い冬も、多くの祝祭日のイベントとそれを一緒に祝う仲間がいることで、時間が経つのを忘れてしまう楽しい期間となります。

田中仁（たなかひとし）



ベラルーシ国立大学在学中から、フリーランスのジャーナリスト、通訳として国内外の新聞や雑誌で活躍中。ミンスク在住。



古本募金 きしゃぽん

ご支援・ご協力をありがとうございます！

読み終えた本やCDなどで募金ができる「古本募金きしゃぽん」を通じて、たくさんのご寄付をお寄せいただいております。

誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします！

◀ これまでにお寄せいただいた寄付額 ▶

◇◇ 1,102,415円(370名) ◇◇

- ◆2017年1月～12月 78,612円(35名)
- ◆2018年1月～12月 139,795円(70名)
- ◆2019年1月～12月 403,362円(97名)
- ◆2020年1月～12月 188,378円(88名)
- ◆2021年1月～12月 292,268円(80名)

あなたのご自宅や職場に眠るお宝が
チェルノブイリ支援につながります



その他、懐かしのおもちゃ、ブリキ玩具(昭和40年代以前のもの)、フィギュア、プラモデル、鉄道模型、洋酒、テレホンカード、商品券、切手、ハガキ、年賀状、カメラレンズ、模型、絵画、万年筆など…

クレジットカード決済・シンカブルのご案内



この度クレジットカードで寄付ができる“Syncable(シンカブル)”を導入しました！

チェルノブイリ医療支援ネットワークのホームページや右のQRコードからアクセ

スが可能です。

お手持ちの端末でお読み取りください



FUKU-NET パネル展に出展しました！



2月1日～2月6日のあいだ福岡市市役所本庁舎 1Fの多目的スペースにてFUKU-NETパネル展が開催され、私たちも写真パネルを展示しました。

お持ち帰り用のチェルノブイリ通信のバックナンバーは、なくなっているものもあり、チェルノブイリ医療支援ネットワークについて知っていただく機会になりました。

2021年度

事業・決算報告

2月26日(土)に2022年度通常総会を開催し、前年度の事業報告・決算報告についての承認が行われました。

なお今回の総会は、3密を避けるため必要最小限の人数で集まり、書面やメール等での議決を基本として実施しました。

当日、オンライン会議ツール「Zoomミーティング」を活用しました。

2021年度事業報告

1) チェルノブイリ原発事故の被災者及び被災地に対する支援事業

■ベラルーシ訪問事業

◎2021年9月にベラルーシ共和国を訪問予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため中止

■被災者と障がい者による福祉工房「のぞみ21」支援事業

◎活動支援、木工品やリネン製品の仕入、日本国内での販売

2) 日本国内での原子力災害などによる被災者及び被災地に対する支援事業

■東日本大震災の被災地訪問調査

◎2021年3月18日(木)～3月25日(木)と9月21日(火)～10月4日(月)と福島県に2回訪問しました。

3) 被災者及び被災地の現状を周知するための普及啓発事業

■「チェルノブイリ通信」発行事業(年4回発行)

◎発行時期:3、6、9、12月 ◎発送部数:約1750～2650部(メール配信を除く)

■イベント企画・運営事業

◎グリーンコープ生協組合員様を対象とした木村真三先生のオンライン講演会を計8回実施

◎オンラインイベントを7月～8月の3日間実施

◎フクネット紹介パネル展を2月5日(金)～12日(金)に実施(福岡市役所1F多目的スペース)

■その他の情報発信事業

◎団体ウェブサイト等での情報発信、イベント等での活動紹介

4) フェアトレード事業

■チェルノブイリ支援コーヒー、紅茶の販売

◎商品カタログのリニューアル

※2022年度の運営体制は次のとおりです。

◆理事長:寺嶋 可南子

◆副理事長:和田 幸策

◆理事:河上 雅夫、中山 悠、川原 秀之

◆事務局長:川原 秀之

◆監事:三島 さとこ

福島訪問の報告会を開催しました!!



2月26日(土)に行われた2022年度通常総会の後、2021年9月の福島訪問についての報告会を開催しました。

今回の訪問に同行した大学生からの報告もあり、現場の方々のお話を聴いたり、様々な資料を見たりする中で学んだこと、感じたことなどを分かりやすくまとめ、発表しました。

◀訪問に同行した大学生2人。富岡漁港にて。

2021年度決算報告(2021/1/1~12/31・予算対比)

(単位：円)

科目	2021年度決算			2021年度予算		
経常収益						
1. 受取会費	45,000	45,000		60,000	60,000	
2. 受取寄付金						
活動支援金	8,493,622			6,500,000		
のぞみ21カンパ	46,500			80,000		
雪だるま3号カンパ	37,500			70,000		
震災支援カンパ	168,000	8,745,622		150,000	6,800,000	
3. 事業収益						
のぞみ21支援事業	24,500			100,000		
フェアトレード事業	629,550	654,050		700,000	800,000	
4. その他収益	248,836	248,836		10,000	10,000	
経常収益計			9,693,508			7,670,000
経常費用						
1. 事業費 (※)						
訪ベラ事業	35,623			5,444,320		
のぞみ21支援事業	93,301			236,320		
震災支援事業	1,468,900			836,320		
会報発行事業	3,128,412			1,848,720		
イベント企画・運営事業	284,599			2,108,720		
その他の情報提供事業	574,910			30,000		
フェアトレード事業	605,261	6,191,006		743,440	11,247,840	
2. 管理費						
人件費	30,815			10,560		
その他経費	212,420	243,235		140,600	151,160	
経常費用計			6,434,241			11,399,000
当期経常増減額			3,259,267			-3,729,000
税引前当期正味財産増減額			3,259,267			-3,729,000
法人税、住民税及び事業税			71,000			71,000
当期正味財産増減額			3,188,267			-3,800,000
前期繰越正味財産額			21,374,160			21,374,160
次期繰越正味財産額			24,562,427			17,574,160

※) 人件費を含めた金額です。また水道光熱費や支払地代家賃等の共通経費も按分されています。

事務局インターンのご紹介

2月～3月の期間、ドッドジェイピーによる「NPOインターンシップ」を活用し、大学生が活動に参加しています。

こんにちは、インターンシップに参加させていただいている篠田菜々香です。



私は環境問題の中でも発電のことに興味があり、原子力と言う未知なものへの探求心から、今回のチェルノブイリ医療支援ネットワークさんでのインターンシップに参加させていただいています。

チェルノブイリ原発事故というものについて考えてみれば、名前しか知らない悲惨な事故でした。しかし、原因が一つではない、完全に終結するには何百年とかかるこの事故から学ぶこともたくさんありました。ここで学んだことを活かして、環境問題に関してできることから行動を起こしていこうと思います。

たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計

446,814円

*活動支援金

346,814円

*のぞみ21カンパ

11,000円

*雪だるま3号カンパ

0円

*東日本支援カンパ

53,000円

*おまかせカンパ

36,000円

(2021年11月〜2022年1月分の寄付内訳)

●口座受付寄付

榎本相川美智子 秋永優子 浅原望樹 石川睦枝 稲毛修子
後野剛 榎本みつ枝 岡田満千代 川崎清美 小西由起
佐々木悦子 佐藤和子 関根敏子 高木裕子 田中京子 田
中直子 谷村禎一・牧子 種和子 佃あけみ 長棟かおる 中
村幸枝 原良隆 引田良子 深田俊江 古本募金しゃぼん
(運営・嵯峨野株式会社) 村上和代 山田信子 友愛幼稚園
藤田房二 吉田久美子 和田由理 和田茉莉恵

〔都道府県別〕

【福島県】 1名	【富山県】 1名	【東京都】 5名
【長野県】 1名	【静岡県】 1名	【愛知県】 1名
【大阪府】 2名	【兵庫県】 1名	【鳥取県】 4名
【島根県】 2名	【広島県】 1名	【山口県】 3名
【福岡県】 38名	【佐賀県】 2名	【長崎県】 1名
【熊本県】 3名	【大分県】 5名	【宮崎県】 3名
【鹿児島県】 4名		

計 79 名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリーサポーターの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井
上礼子 内野千鶴子 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久
保伸子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子
片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川
崎君子 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚
子 財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 坂口馨
子 佐々野也依 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵
子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子
田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 富
永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中
島まゆみ 永野沙智子 西首延子 丹羽道代 納富育代 深
川哲臣 福井初子 福本勲子 藤本孝子 瀧田三輝 古川恵
子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山子より 水本敬
子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子
山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子

計 109 名(匿名含む)

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。
す。皆様よりお預かりしたご寄付は、チエルノブイリ被
災者医療支援、福祉工房希 21 支援、東日本震災被災
者支援、事務費用等にあってさせていただきます。

※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲
載しております。

皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●スタッフ皆さまの健康が守られますように。●いつ
もありがとうございます。●わずかでも永くつながれ
ていることに感謝いたします。●皆様の幸を祈りま
す。●少しですが、役立ててください。●この本が、ど
なたかの所に巡り、お役に立つ事を願います。●おい
しいコーヒーを飲んで、少しでも支援になればうれ
しいです。ありがとうございます。●遅くなって申し訳あ
りません。●いつもお世話になります。●先日はどう
もありがとうございました。電話したときにはテレフォ
ンカードを送りますと言っていました。●少しばかり
古い年賀状をみつけたので同封します。よろしく
お願いします。●通信を読ませていただきました。
チエルノブイリと福島、2つの原発事故は私の中で世界
への向き合い方を変える起点となりました。●2,9
50円は寄付としてお受け取り下さい。●いつもあり
がとうございます。よろしくお願いします。●会報の
送付ありがとうございます。●チエルノブイリ被災者
の健康と笑顔の為に！●少しですがお役に立てれば
嬉しいです。

お知らせとお願い

振込

用紙は原則として毎号同封
しています。これは「思い立つ
た時にいつでも振り込みできるように、毎号
同封してほしい」というご要望があったからで
す。決してお振込を強要するものではありません。
恐れ入りますが、ご不要な方は処
分をお願いいたします。

集後記

太宰府市は毎年寒く、特に昨年は一面真っ白になるくらい雪が積もっていたのですが、今年は薄らと積もる程度
で比較的暖かいようです。雪景色の中の太宰府天満宮は綺麗なので、今年は見られず少し残念です。(S・A)